

# 教養課程の英語授業における多読用教材の活用

— 副教材としてのピクチャーブックの導入を通して —

上 垣 公 明\*

Use of Extensive Reading Materials in Liberal Arts English Class

— Some pedagogical implications obtained by use of picture books —

Kimiaki UEGAKI\*

## 要旨

工学系の分野を専攻する学生のクラスで、英語読解の副教材としていわゆるピクチャーブック(PB)を導入し、それによってどのような学習効果が得られるのかについて調査した。合計9回の授業でPBを使用し、学生に毎回、「印象に残った英文とその和訳」と「日本語での感想文」を授業の終了時にペーパーで提出させ、それらについていくつかの視点から検討した。また最後の授業でアンケートを実施し、PBの写真(絵)がどのような学習効果を生み出したと学生自身が認識しているのか、また、彼らがPBをどのように受け止めたのか等について調査した。

## 1 序

一般的な傾向として、工学系の分野を専攻する学生に関して、英語が苦手科目である学生は少なくない。また、教養課程における従来型のリーディングの授業ではクラス全員が同一のテキストを使用し、訳読を中心とした単調な作業の繰り返しになりがちで、学生の集中力を持続させるににくいのが実際のところである。特に英語学習に対するモチベーションの低い学生は、その傾向が強いように思われる。このような状況を鑑み、今回、学生の英語に対する苦手意識を軽減し、学習へのモチベーションを高めることを目的としてピクチャーブック(以下PB)の導入を試み、それについての調査を行った。今回使用した教材は英文数が最小限に抑えられ、写真や絵を中心とした「絵本」としての色彩の強いものである。一般的に、英語が苦手な学生は程度の差はあって

---

\*大阪電気通信大学短期大学部電子情報学科助教授

もある種の「英語アレルギー」のようなものを持っている場合が多く、そのような学生にとって、英文数が少なく写真や絵が中心となっている教材を使用することで、それが弱められるという効果が期待される。さらに、文字による理解が不得意な学生にとって、写真や絵という視覚による情報は彼らの内容理解を助けるだけでなく、文字での内容理解に対するモチベーションを高めることも期待される。

ESL（第二言語としての英語学習者）における視覚教材（文字だけではなく、写真、絵、などを含む）の有効性については、これまでも様々な研究が行われてきた。例えば、Watanabe (1985) はESLにおける視覚教材の使用に関して、学習者は写真（絵）の情報によって英文を読む前から粗筋を推測することができ、それによって先の内容を予測しようとすることへの負担が軽減され、読解を効果的に進めることができるようになることと分析している。またAndrews (2002) らは、ビギナーの英語学習者に対してイラストだけの教材、文字だけの教材、両方が記載された教材を使用してそれぞれの場合の学習者の理解度を調査し、文字だけの教材については理解度が低く、その他の2つについては前者を上回るかたちで同程度の理解度であったという調査結果を示し、イラストが理解の助けとして機能したためであると結論づけている。さらに、白須 (2004) は中学レベルの英語学習者に対する英語授業での絵本の導入に関して「……絵本に関して重要な点は、挿絵や写真が話の内容理解を助けてくれることである」と述べ、読解の援助という点での視覚情報の有効性を指摘している。

また、2006年10月に出版された『英語教育』の増刊号では「ヴィジュアルを活用してイキのいい授業を！」と題して、英語教育における「視覚教材」の活用についての特集が組まれている。そこでは、写真や絵も含め、新聞の切り抜きから、DVD・パソコンなどの機器まで、様々な手段を駆使した授業の実践報告やそれに関わる研究論文などが多数紹介されており、近年のその分野への関心の高まりを窺うことができる。\*\*

## 2 調査

### 2.1 目的

PBの導入によって、読解に対する学生の学習態度にどのような効果が見られるのかを調査する。具体的には、PBへの取り組みの意欲の向上を測る指標として、PBを読んだ後の「印象に残った英文とその和訳」（調査1）と「日本語での感想文」（調査2）に注目して調査を行う。その結果について統計的手法を用い、学生のそれが向上したかどうかを検証する。

### 2.2 対象学生

大阪電気通信大学工学部の2年次生で、「実用英語1」の授業を履修した学生22人を対象とした。

---

\*\*先行研究について、本学工学部英語教育センター山崎純一教授にご教示をいただき、ここに感謝を申し上げる次第である。

## 2.3 使用教材

今回、PB教材として、NelsonのPM Plus Non-fiction Levels 18&19とPM Animal Facts in Turquoise Levelを使用した。教材は各セットが6種類からなっており、合計2セット、12種類のものを用意することができた。前者のセットでは「乗り物」が、後者のセットでは「動物」が共通のテーマとなっている。使用する学生が工学系の学生であることを考慮し、できるだけ科学的なテーマを扱ったものを選択した。

教材の構成としては、文字よりも写真や絵に重点がおかれている。1冊が約20頁で、英文の多くは語彙、長さ、文法などの点で日本の中学校の高学年で学習する程度のもと考えられるが、学生にとっては難しいと感じる文も含まれていたようである。1頁あたりの英文数は3～5である。1冊の英文の量やレベルからすると、学生が1回の授業（20～30分間）で充分読了できるものである。

## 2.4 調査方法及び教示内容

実際にPBを使用したのは全15回の授業のうち9回で、使用時間は授業時間の最後の20～30分間とした。教材の選択については、できるだけ新鮮な気分学習に取り組めるように、毎回異なったものを選ぶよう指示した。意味が解らない単語があっても、それを推測する程度でできるだけ読み進むよう指示した。学生には毎回の授業終了時に、ペーパーを提出させ、同時にPBを回収した。ペーパーの記入項目は「印象に残った英文とその和訳」と「日本語での感想文」とした。学生が提出したペーパーについては和訳の誤りを修正し、感想文にコメントを書き、次の授業で学生に返却した。優れた内容のものについては、成績に加点することを予め通知しておいた。

9回の授業で3回以上欠席した学生は調査の対象外とした。この授業に対しての評価を最後の授業でアンケートを利用して学生に行わせた。

### 調査1 「印象に残った英文とその和訳」

辞書の使用は可とした。選択する英文や和訳の正確さについて、特に指示はしていない。

### 調査2 「日本語での感想文」

感想文の形式、長さ、内容について特に指示はしていない。

## 3 結果と考察

### 3.1 調査1の結果と考察

#### 3.1.1 内容について

この項目について未記入の学生は皆無であり、全員が何れかの英文を書いていた。和訳について文法面での細かい誤りはいくつか見られたが、大きな間違いはそれほど目立たなかった。特筆すべき点は、日本語として意味をなさない訳文がほとんど無かった点である。従来の定期試験の解答ではそのような訳文を目にすることがしばしばあるが、今回それが見られなかったのは、写真（絵）からの情報が英文の内容理解に良い影響を与えていたためと推察される。

### 3.1.2 英文の長さについて

学生の課題への取り組みの熱心さを測る指標として、選択した英文の長さ（単語数）に注目した。合計9回分の課題で学生が選んだ英文の単語数を調べ、その平均値と標準偏差を表1に記した。

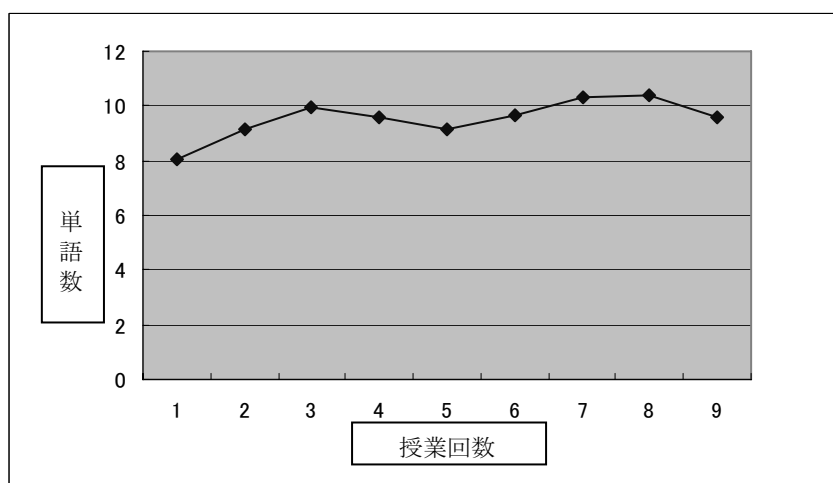
授業回数	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目
平均値	8.1	9.1	9.9	9.6	9.2	9.6	10.3	10.4	9.6
標準偏差	2.4	3.8	2.6	3.8	3.9	2.9	2.8	2.5	3.1

N=18 ※3回以上欠席の学生はデータに含まれず。(22人中18人)

表1 選んだ英文の単語数の平均と標準偏差

表1をグラフ化したものが図1である。

図1 選んだ英文の単語数の平均



学生が選択した英文の長さの伸長が、どの程度学生の英語力を反映するものであるかは明確にはわからないが、少なくとも、長い文に挑戦してみようとする学習意欲を示す指標としては注目に値する。図1からは、学生が記述した英文の単語数が全体として増加傾向にあることが見て取れる。これについては、初回（8.1）と最終回（9.6）の間には、1.5ポイントの差があり、5%水準での有意差はないが、有意傾向が見られる( $t=1.72, p>.05$ )。図をさらに詳しく見ると、3回目（9.9）をピークとして4回目（9.6）、5回目（9.2）で下降し、その後6回目（9.6）～8回目（10.4）で上昇し、再度9回目（9.6）で下降しているが、このように変化を繰り返し長期的には上昇するという傾向は、学習を重ねていくと学習の半ばで進歩が停滞するという「高原現象」(plateau)の特徴であり、学習者の一般的な傾向と考えられる。

この図で注目したいのは、平均値を示した曲線の2つのピークと、2つのボトムそれぞれの差である。これらの値が最も的確に学生の学習態度の変化を示していると考えられる。最初のピーク（3回目）（9.9）と2番目のピーク（8回目）（10.4）において0.5ポイントの差が見られるが、これらの値については5%水準で有意差は見られない ( $t=.33, p>.05$ )。また、最小値である初回

(8.1) と途中のボトムである 5 回目 (9.2) との差は1.1ポイントであるが、これらの値についても 5 %水準で有意差は見られない ( $t=1.27, p>.05$ )。したがって、これら 2 組それぞれの差の程度については有意差を見出すまでには至らないが、前述のように、傾向としては 2 つのピークで 0.5ポイント、2 つのボトムで 1.1ポイント上昇しており、そのような上昇傾向は学生の学習意欲の向上を示すものと考えられる。

### 3. 2 調査2の結果と考察

#### 3. 2. 1 感想文の内容について

形式を特に指示しなかったので、感想文の内容には様々な種類のものがあつた。それらはいくつかのパターンに分類できる。

##### ① 情報を提示したもの・まとめたもの

最も多かったのは内容をまとめたものであつた。なかには英文から理解できた情報を直訳して記述している例もあつた。最も多かったのは情報を単に提示しているもので、その場合「ということだ」「～である」という文尾のものが一般的であつた。その他に「～ことを初めて知つた」「～は意外だつた」「～が本から読み取れた」などのように、客観的な視点から述べている例もあつた。文尾が「～らしい」「～のようだ」「～そうだ」となっているものもあつたが、それらは、英文の内容が正確には理解できず、写真(絵)による情報から推測したものと考えられる。

教材の内容に関連して自分の願望や希望を書き加えたものもあつた。その一般的な例として「～がすごい(偉大だ)と思つた」「～が面白かつた」「～に感動した」「～は不思議である」のようなものを挙げるができる。なかには、「～の写真は見ていて辛い」のような感情的にのめり込んでいる様子が窺えるものもあつた。文字情報だけでは、そこまでのことは期待できないであろう。

一方、「～の必要があつたと思つた」「～という気持ちになつた」「～と願う」「勉強になつた」「～が大切だと感じた」のような、教訓的な内容を含むものもあつた。

##### (実例)

- ・カンガルーの赤ちゃんは 5 ヶ月もすると、袋から顔を出すというが、その写真は何とも不気味だ。
- ・世の中で電車というものがいかに役にたっているかがわかる。考えた人はえらい。
- ・クマは魚以外にも草、木の実、花、種、きのこ、虫、どんぐりなどを食べるのは知らなかつた。
- ・ゴリラの主食は葉っぱ。あの体を保つのに肉を食わないとはどういう体のつくりなのだろうか。色々と不思議である。
- ・各国の色々な種類の列車が取りあげられていて、特にその列車のデザインの豊富さに驚きました。

##### ② 自分の意見・体験を述べたもの

教材のテーマや内容と関連づけて、自分の意見や体験を述べた例や、「～してみたいと思つた」のような自分の希望を述べたものや、「～だろうか」「先生は知っていますか」というような、問い掛け形式のものもあつた。感想文に加えて、イラストを描いていた例もあつた。

(実例)

- ・昔、トレーラーにのって、オジサンにひどく怒られたことを思い出します。あれは怖かったですよ。
- ・そんな技術があるのなら、水面にも陸上にも降りられる飛行機を作れば、飛行機事故で死ぬ人も減りそうなものだが、できないのだろうか。
- ・個人的にはライオンよりトラのビジュアルの方が好きだ。ライオンのたてがみは何となくいやだ。
- ・高校の修学旅行で一度船に乗った。初日は酔い止めのおかげで大丈夫だったが、朝起きたら死にそうになった。あれはひどかった。
- ・実は「モノレール」とやりに乗ったことはありません。乗ってみたいです。

③ 教材に対する率直な感想を述べたもの

教材に対する正直な感想を述べているものもあった。その例としては「外国の教科書はカラーで良いなと思った」「写真がとても美しいと思った」「貴重な写真が見られて良かった」「毎回美しい写真には目を奪われるが、～」「写真は印象に残った」や、否定的な評価の例としては、「内容が簡単で読みやすかった」「逆に感想が書きづらいと思った」「知っている事ばかりだったので、特に感想はありません」「特に書くことはありません」「今回は内容を理解するのに、時間がかかった」などが挙げられる。

これらの肯定的な評価、否定的な評価のいずれについても、学生の率直な反応や印象を知るうえで、有意義なものといえる。

(実例)

- ・昔から今までの船の姿の写真や歴史が書かれていておもしろかったが、もう少し社会的なことが知りたかった。
- ・前よりも読むのに時間がかかり、内容を把握するのに時間がかかってしまった。
- ・今日は自動車の本がまわって来なかったなので、次回に読みます。
- ・色々な船があっっておもしろかった。特に書くことはありません。
- ・今回は英文には全く印象に残るものはなかったけど、とにかく写真が美しいものばかりだった。

3. 2. 2 感想文（日本語）の文章数について

学生が感想欄に記入した感想文の数（文章数）に注目し、合計9回分の課題を対象とした文章数の平均値と標準偏差を表2に示す。

授業回数	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目
平均値	3.2	2.8	5.1	4.4	4.4	4.2	6	5.4	4.5
標準偏差	2.1	1.9	3.1	3.9	2.5	3.3	3.8	3.4	2.9

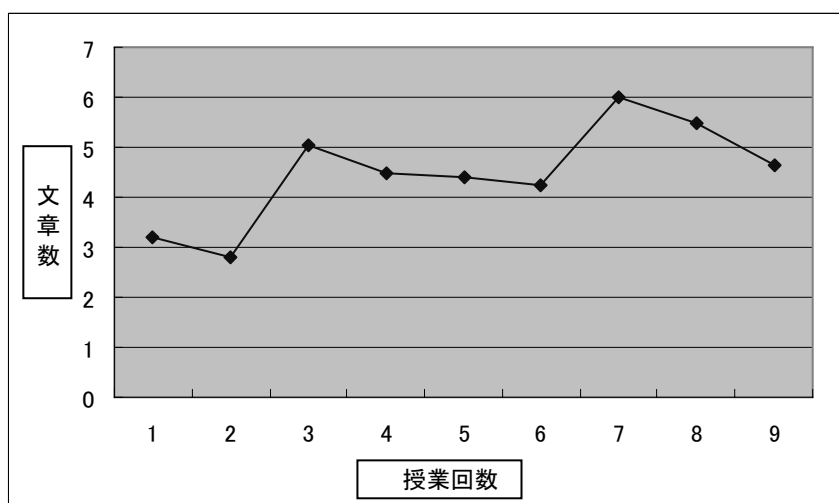
N=18 ※3回以上欠席の学生はデータに含まれず。(22人中18人)

表2 感想文の文章数の平均と標準偏差



図2は、表2をグラフ化したものである。

図2 感想文の文章数の平均



感想文の文章数も、学習意欲を示す指標の一つと考えられる。初回 (3.2) と最終回 (4.5) の間には1.3ポイントの差があるが、これは3%水準でも有意差が見られる ( $t=2.11$   $p<.03$ ) 値である。したがって、全体として見た場合、学習意欲が向上していることを示すものと考えられる。また、この図においても、図1同様に文章数の平均値が一直線の右上がりではなく上下動を繰り返す長期的には上昇傾向を示しており、これについても「高原現象」の特徴を適用できると思われる。

次に、平均値の推移における2つのピークと、2つのボトムの差に注目したい。1番目のピーク(3回目) (5.1) と2番目のピーク (7回目) (6) には0.9ポイントの差があるが、それについて有意差は見られない ( $t=1.74$   $p=.053$ )。一方、1番目のボトム (2回目) (2.8) と2番目のボトム (6回目) (4.2) の差 (1.4ポイント) について5%水準では有意差は見られないが、有意傾向は見られる ( $t=1.51$ ,  $p=.07$ )。これらの結果から、調査2に関しては調査1よりも明確な向上傾向を示していることが見て取れ、わずかではあるが学習意欲の高まりを示しているといえる。

#### 4 アンケートの結果

アンケートは最後の授業で実施した。無記名で、項目1以外は全て記述式とした。対象は最後の授業の出席者22人とした。質問項目は以下の7つとした。

- ① 同様の教材の使用経験があるか？
- ② 教材のテーマをどう思ったか？
- ③ 写真(絵)についてどう思ったか？
- ④ 英文についてどう思ったか？
- ⑤ 写真(絵)がどの程度読解に役立ったか？
- ⑥ 学習の姿勢にどのような違いがあったか？
- ⑦ 同様の教材をまた使用して欲しいか？

表3 アンケート結果

項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
肯定	1	15	18	14	17	18	13
否定	21	5	2	8	3	3	3
その他	0	2	2	0	2	1	6

上記7項目の詳しい内訳を以下に示す。

① 同様の教材の使用経験があるか？

・ある 1      ・ない 21

この結果から、このような絵や写真を多く用いて構成されている教材の経験がない学生が圧倒的に多いことがわかる。

② 教材のテーマをどう思ったか？

肯定的な意見（15人）の内訳—

・わかりやすい 5      ・良い 3      ・ちょうど良い 2      ・面白い 2  
 ・様々なテーマなので、良い 2      ・身近なものなので、良い 1

否定的な意見（5人）の内訳—

・幼稚すぎる 2      ・簡単すぎる 2      ・難しいものがいくつかある 1

肯定的な反応が多かった理由として、対象が工学部の学生であったためテーマと合致したことが考えられる。予想していたより、幼稚、退屈というものが少なかった。

③ 写真（絵）についてどう思ったか？

肯定的な意見（18人）の内訳—

・わかり（見）やすい 9      ・きれい 5      ・良い 2      ・面白い 2

否定的な意見（2人）の内訳—

・理解しにくいものがある 1      ・絵の説明が欲しい 1

絵を肯定的に評価している学生が非常に多い。絵の説明についての不満が少なく、満足度はかなり高いと考えられる。絵の分かりやすさについては、絵と文とのつながりが適切であったことも関係していると考えられる。

④ 英文についてどう思ったか？

肯定的な意見（14人）の内訳—

・読みやすい 12      ・ちょうど良い 2

否定的な意見（8人）の内訳—

・文に難易度の差がある 5      ・難しい 3



教材には、実際に多少難しい英文も含まれており、その意味では「文に難易度の差がある」と答えた5人は冷静な判断をしたといえる。しかし、読み易いと答えた学生の方がそれを大きく上回っており、その要因として、英語の難しさへの意識が絵によって弱められたことが考えられる。あるいは、絵の情報からの推測によってとりあえず読み進むことができるために、難しいという印象が残らなかったことも考えられる。もし、写真（絵）が無く文字情報だけの教材であったならば、英文の難度がもっと明確に認識されもっと多くの学生がそのように答えていたことも予想されるであろう。

⑤ 写真（絵）がどの程度読解に役立ったか？

肯定的な意見（17人）の内訳—

- ・かなり役立った 11
- ・ある程度役立った 6

否定的な意見（3人）の内訳—

- ・役立たない 3

否定より、肯定の回答をした学生の方が圧倒的に多い。否定的な回答をした理由については、今後、検討すべき課題である。

⑥ 学習の姿勢にどのような違いがあったか？

肯定的な意見（18人）の内訳—

- ・興味が持続できた 8
- ・読みやすくなった 9
- ・実感がわいた 1

否定的な意見（3人）の内訳—

- ・特にない 3

この項目についても、⑤の項目同様に否定より肯定の回答をした学生の方が圧倒的に多いことがわかる。

⑦ 同様の教材をまた使用して欲しいか？

肯定的な意見（13人）の内訳—

- ・欲しい 13

否定的な意見（3人）の内訳—

- ・欲しくない 3

その他（5人）の内訳—

- ・どちらでも良い 5
- ・無記入 1

どちらでも良いという学生が5人いるが、これは他の項目と比べると、少し多い。また、肯定的な回答をしている学生は13人いるが、それは他の質問の場合と比べると、少し少ない。この項目については、後期の授業での使用に影響すると学生が考えたことが推測され、その意味では、教材の評価についての最も正直な考えを反映したものと考えられる。

## 5 考察

読解力を向上させるための方途としてPBを導入し、その効果等について考察を行った。調査1「印象に残った英文とそれの和訳」、調査2「日本語での感想文」の両方において、いくつかの値に関して学習意欲の向上を示唆するものを見出すことができた。したがって、学生がこのような学習を継続的に行っていくことによって英語学習へのモチベーションが高められ、さらに、それが英文の読解能力の向上につながっていくことが期待される。

またPBについてのアンケートからも、いくつかのことが明らかになった。教材のテーマ、英文、写真（絵）については肯定的な回答をした学生が非常に多く、「幼稚」「退屈」などの否定的な回答はわずかであった。また、写真（絵）と読解との関係についても、役立ったと答えた学生が非常に多く（アンケート項目（以下省略）⑤：17人）、役立たなかったと答えた学生は少数（⑤：3人）であった。さらに、写真（絵）と学習態度との関係についても、肯定的な回答（⑥：18人）が否定的な回答（⑥：3人）を大きく上回っていた。このような数字は、写真（絵）が英文の読解の助けになっていることを学生自身が認識していることを示すものである。

実際にこのクラスでは、授業の中盤になると、集中力が薄れ、授業以外の事を考えていたり、うつむいていたりする学生の数が増えてくることが多かったが、PBを配布した途端にほぼ全員の学生が熱心に教材に取り組むという場面を幾度も目にした。このような変化を学生たちにもたらした主たる要因が、PBに掲載されている鮮明な写真（絵）にあることは容易に推察される。学生たちは、まず初めに写真や絵に対して興味や関心を抱き、次に、それに誘発されて英文に意識を移すというプロセスを辿ったのであろう。このようなプロセスは、ともすると、従来のリーディング教材としての本来のあり方から逸脱しているのかもしれない。しかし、どのようなかたちであれ、結果的に多くの学生が英文に強い関心をもつに至ったという事実は重要である。萩野(2006)が「(ヴィジュアルなものは)ことばよりもダイレクトに我々の感性に訴えかけ、想像力をかき立ててくれることもあります」と述べているように、写真や絵などの視覚要素は、英語の得意、不得意に関係なく、全ての学生に最も明確に訴えかけるメッセージであり、その点からすると、視覚要素が中心に据えられたPBは、特に英語への関心の低い学生に対する教材として、大きな可能性を有していると考えられる。

今回の調査では、対象群が少ない点や、PBの写真（絵）と読解力向上の関連性についての、事前・事後テスト等による検証がなされていない点など不十分な点があり、今後はそのような点も考慮し、研究を発展させていきたい。

### 参考文献

- Andrews, J.& Scharff,L.& Moses,L. 'The Influence of Illustrations in Children's Storybooks' Presented at AERA 2002; retrieved at <http://hubel.sfasu.edu/research/develread.html> (the full paper is available:Reading Psychology, Vol 23(4),pp.323-339.)
- Hiroko, WATANABE. (1985) 'Use of Pictorial Images to Facilitate Top-Down Processing in EFL Reading'In JACET Bulletin No.16, pp.71-84.
- 萩野俊哉 (2006)「テストもヴィジュアルイズ」『英語教育』(10月増刊号)大修館. pp.28-30.
- 白須康子 (2004)「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『人文研究』(神奈川大学人文学会) No.154, pp.83-111.
- 山内光哉、春木豊編著(1985)『学習心理学—行動と認知』サイエンス社